

# 奈良八景考

——成立時期の特定と選定の視点について——

安宅 望

## はじめに

瀟湘八景の日本における受容についてはすでに多くの研究があるが、その中の一つである奈良八景の成立の実態は、これまで各研究者が簡単に言及するのみで詳しく論じられることもなくまた研究の対象にもなっていない。この稿では奈良八景についてその周辺状況を整理して成立の時期を特定する試みを行いたい。また奈良の古歌をデータベースから抽出し、その地名と景物との関係を考察して奈良八景選定の特徴を明らかにしたい。このように成立の過程と背景を明らかにすることで、奈良八景が瀟湘八景受容期に「八景を撰ぶ」というアイデアをいち早く取り入れた八景現象であるとともに、日本ならではの受容形態を持つことを示したい。この稿によって今後の八景研究に新たな視点を提供できれば幸いである。

## Ⅰ—Ⅰ 日本における八景現象の始まり

瀟湘八景とは言うまでもなく、中国湖南省の洞庭湖に注ぐ湘江とその支流である瀟水の流域の風景を八つ選んで詩題・画題にしたものである。当時の日本人が容易に見ることができない風景を詩や画という媒体を使って様々なイメージを膨らませてきたのが瀟湘の風景であった。

日本への八景受容の最初の例として挙げられるのは日本人禅僧の鉄庵

道生（一二六二—一三三二）が作った「博多八景」である。鉄庵が元応元年（一三一九）から四年余り博多聖福寺の住持を務めた経験を基に瀟湘八景の趣向を取り入れた八景を選定して自ら詩を詠んだ。八景とは、「香椎暮雪」「箱崎蚕市」「長橋春潮」「莊浜泛月」「志賀独釣」「浦山秋晚」「一崎松行」「野古帰帆」である。景物は瀟湘八景そのままではない。

もう一つ初期の八景として注目されるのが康暦二年（一三八〇）に成立した大慈八景詩歌である。日向国志布志（現鹿児島県志布志市）にある臨濟宗大慈寺の境内や周辺の景色から八景を撰んでそれに詩を合わせたものである。この大慈八景詩歌は奈良八景の成立に少なからず影響を与えていると筆者は考えている。義堂周信の日記である『空華老師日用工夫略集』<sup>②</sup>の康暦二年七月十八日条には、「十八日、為清祖侍者求、改八景目子、蓋日向州龍興山大慈寺境致也、」とあり、大慈寺の八景の目子（題目）を改めるよう清祖侍者から求められたとある。清祖とは柏庭清祖という足利一族の禅僧で当時は義堂周信の侍者をやっていた。また同月二十七日条に「廿七日、往雲居菴、与普明国師説話、即見出示大慈八景龍山春望詩、」とある。普明国師とは臨濟宗の禅僧で当時南禅寺の住職であった春屋妙葩のことである。春屋妙葩と会い大慈八景詩歌の内第一の龍山春望の詩を見せられた、というのである。これらの記事は義堂周信も大慈八景の成立と詩歌の制作に関与していたことを示している。元々「大慈八景詩歌集叙」によれば京から離れた日向国において、優れた風景を持

つ大慈寺の無名なのを惜しんだ九州探題の今川了俊が肝いりとなって禅僧と公家に詩歌を頼んだことから始まるのである。つまり京の禅僧・武家・公家が八景詩歌という新しい趣向を鄙の寺を題材に詩作を試みたのである。

大慈八景とは以下の通りである。「龍山春望」「古寺緑陰」「野市炊煙」「魚浦帰舟」「橋辺暮雨」「江上夕陽」「東宮秋月」「西塞夜雪」。大慈八景の特徴は上の二字が具体的な地名ではなく場所を表す一般名詞で表現されていることである。京で大慈八景の詩作をした人々は実際に日向国の現地に行ったわけではないので、詩題としてイメージしやすい言葉に置き換えて大慈八景を選定したのである。これは堀川貴司も指摘している通り大慈八景をプロデュースした義堂周信や今川了俊による瀟湘八景を念頭に置いた仕掛けであると言えよう。

## I-2 奈良八景の概要

以上の二つの八景（博多八景・大慈八景）が八景現象受容期に現れた日本の八景の嚆矢である。奈良八景がそれに続くものであることをこの論考で述べていくことになる。まず奈良八景が如何なるものかを概説する。奈良八景は南京八景・南都八景とも書かれるがこの稿では特に注記が無い限り奈良八景で統一したい。

奈良八景の文献上の初出は足利義政の側近であった禅僧蔭涼軒真薬が寛正六年（一四六五）九月の將軍足利義政春日社参に随行了した際の日記にある。『蔭涼軒日録』寛正六年九月二十六日の条、夜に小雨が降り延節の遊宴が無くなってしまった。<sup>③</sup>その日の日記の末尾に「南都有八景東大寺鐘、春日野鹿、南円堂藤、猿沢池月、佐保川蛩、雲居坂雨、轟橋旅人、三笠山雪」とメモのように書き記している。近江八景の始まりと言われる明応九年（一五〇〇）よりも早く文献で確認できることから永島福太郎

は「蔭涼軒真薬西堂の南都見物」（『禅文化研究所紀要一五、一九八八』）の中で「日本において八景が選定された最古の徴証である」と述べている。博多八景、大慈八景という先行する八景があったが後世それが詩題・画題としてさほど影響力を持たなかったことを考えると、ある程度人口に膾炙した奈良八景を最古の例とするのもあながち的外れとは言えない。ただ、永島は「本邦の八景選定は、五山文僧らの詩文活動に刺激され、和漢兼帯の教養を高揚する貴族僧俗が触手したにちがいない。（中略）南都八景にしても、当初選ばれた八景が異議なく後世にまで伝来するのだから、公家貴族の選定によるものだといえる。南都八景は興福寺一乗院・大乘院両門跡、あるいは東大寺尊勝院・西室などの院家のサロンで称えられたことであろう」と述べている。真薬が禅僧であったことから南都八景の成立を南都における公家と禅家との交歓の中の産物と考えた。そしてその成立時期を「寛正六年からさほど遡るものではない」として「將軍義満時代を過ぎた將軍義持・義教の両代、一五世紀前半期が推測される」としている。この永島の説は『蔭涼軒日録』を根拠に筆者である真薬を起点に考えると首肯できる部分もあるが、八景に付随する和歌と漢詩も含めてもう少し掘り下げて考える必要がある。

奈良八景の成立時期についてはさらに遡る説があり、本稿ではその説を次節以降で考察することになる。井上宗雄の『中世歌壇史の研究』南北朝期（明治書院、一九六五）において永徳二、三年（一三八一、八三）の歌会記録について言及した部分の註で「名数和歌集には八景歌が多く収められているが、中に「南京八景」という詩歌がある。（中略）書陵部蔵数量和歌集は歌のみを収めるが、良基を太政大臣、公勝を権中納言とし、永徳二年のものと思われる。雅幸もその頃の名である（次いで改名雅縁）。八景歌は定家・為相以下多く残るが検討を要するものがある。但し右の南都八景は信用できよう。」<sup>⑥</sup>と述べて南都八景歌の成立を永徳二年頃

(二三八二)としている。堀川貴司の『瀟湘八景』(臨川書店、二〇〇二)にも「南京八景詩歌」の一節を設け、詩歌作者の官職から永徳二年の成立と推定している<sup>⑦</sup>。小川剛生の『二条良基研究』(笠間書院、二〇〇五)では詳細な二条良基年譜において永徳元年(二三八二)の項の末尾に「南都八景詩歌を催すか<sup>⑧</sup>」とある。このように奈良八景詩歌の作者から選定の経緯と時期を割り出す本格的な試みは未だなされていない。次章では筆者は康暦・永徳期の京周辺の政治・歌壇の状況を精査することで奈良八景の永徳期成立を跡付けてみたい。

奈良八景の全容を宮内庁書陵部所蔵の江戸前期の写本『待需抄』<sup>⑨</sup>によって示す。漢詩については諸本によって若干異同がある。

### 南京八景

#### 南円堂藤

華楼高栱玉座春 紫藤花照紫金身

我先昔得至誠感 後世子孫為世臣

藤なみは神のこと葉の花なれば八千世をかけて猶そさかへん

前関白左大臣近衛道嗣公  
太政大臣二条良基公

#### 佐保川螢

一带晴川華館傍 緑楊陰暗引風涼

晚来千点流螢乱 疑是大官庭燎光

飛ほたる影をうつして佐保川のあさせにふかきところをぞしる

権中納言三条西公時卿  
前内大臣三条公忠公

#### 猿沢池月

水浸影娥秋滿塘 神啼鬼哭是巫陽

今夜誰攬藻中玉 解為先王教斷腸

長閑なる浪にぞこぼるさる沢の池よりとおく月はすめども

文章博士菅原淳嗣朝臣

#### 春日野鹿

無臭無声野色妍 只看麋鹿食草眠

舜深山与文靈園 斯処聖神易地然

春日山みねのあらしやさむからんふもとの野へに鹿ぞ啼くなる

参議右大弁勸修寺経重  
権中納言一条公勝

#### 三笠山月

白雪無辺蔵数峯 和光垂跡此山中

于時大樹着花処 荣色知新利物功

三かさ山さしてたのめばしら雪のふかき心を神やしるらん

左大臣徳大寺実時公  
前右大臣西園寺実俊公

#### 雲井坂雨

霹靂春鞭井底龍 乘時变化与雲従

躍翻三級禹門浪 金榜尚遺風雨跼

むら雨のはれまにこえよ雲井坂みかさの山はほどちかくとも

文章博士菅原秀長朝臣  
権中納言為重卿

#### 東大寺鐘

刻桶丹楹映古城 金僊十六丈崢嶸

洪鐘撞動黄昏月 誰聽当初第一声

おく霜の花いつくしき名もたかしふりぬる寺の鐘のひびきに

権大納言久我入道相国具通公  
前大納言四辻入道善成卿

#### 轟橋行人

月落鐘沈山色澹 暮行失歩白雲程

孤村烟雨笠簑重 一片板橋車馬轟

うちわたる人めもたへず行く駒のふみにぞならせ轟の橋

権中納言大炊御門冬宗卿  
前中納言小倉実遠卿



## II 奈良八景成立の時期を考える

### II-1 八景詩歌の作者の検討

奈良八景成立の時期を考えるには、奈良八景に付随する詩歌の作者の活躍時期を見ることが先決である。各作者のプロフィール、それぞれの景に対する組み合わせ、政治的・歌壇的立場、そして推定される成立年代永徳元年・二年（一三八一・八二）頃の出来事・事件などを総合的に検討して、奈良八景詩歌制作のアイデアが共有された時、詩歌が作られた時、そして何らかの形でそれらが披露された時を考えてみたい。管見の限り明確にその時期を記した記録や史料は無いので、状況を鑑みての推定となる。以下の八景の順番は『待需抄』による。

#### 南円堂藤

前関白左大臣近衛道嗣は正慶元年（一三三三）生まれで至徳四年（一三八七）薨去。康安元年（一三六一）関白となり氏長者となる。貞治二年（一三六三）関白を辞す。従一位。日記「愚管記」の筆者である。永徳元年三月十五日後円融天皇が室町御所に行幸し三舟の遊が行われた時、詩の舟に乗った。藤原北家撰関家で二条良基とは政治的なライバルであった。太政大臣二条良基は元応二年（一三三〇）生まれで嘉慶二年（一三八八）薨去。藤原北家撰関家で永徳元年（一三八一）太政大臣となる。氏長者・准三后にもなった。有職故実に通じ、和歌を頼阿、連歌を救済に学ぶ。当代一流の政治家であり文化人でもあった。三舟の遊の際は天皇とともに和歌の舟に乗った。様々な状況から二条良基が奈良八景選定の中心人物であると筆者は考えている。

この二人は撰関家の氏長者として政治的・文化的にも影響力が強かった。藤原北家の心の拠り所である興福寺南円堂の詩歌を撰関家の氏長者が詠むのも蓋し当然と言える。

#### 佐保川堂

権中納言三条西公時は暦応二年（一三三九）生まれ、永徳三年（一三八三）薨去。藤原北家閑院流正親町三条流で三条西家の祖である。応安七年（一三七四）権中納言に任ぜられる。永和元年（一三七五）侍従を兼ねる。永徳三（一三八三）権大納言となった。従二位。三舟の遊の時は道嗣と共に詩の舟に乗った。

前内大臣三条公忠は正中二年（一三三五）生まれ、藤原北家閑院流。永徳三年（一三八三）薨去。号・後押小路内大臣。延文五年（一三六〇）内大臣となり、貞治元年（一三六二）従一位に叙せられ、内大臣を辞した。歌人で有職故実にも通じた。日記に「後愚昧記」がある。三舟の遊には良基と共に和歌の舟に乗った。

兩人共に藤原北家閑院流の出身である。それぞれ道嗣、良基の側近として実力十分な者同士の組み合わせである。

#### 猿沢池月

文章博士菅原淳嗣は生没年不明である。大学頭で正四位下であった。當時の一流漢学者であり、近衛道嗣の日記『愚管記』などに改元の素案を出すよう諮問を受けるなど再三名前が出てくる。三舟の遊には詩の舟に乗った。

左近衛権少将藤原雅幸は延文三年（一三五八）？生まれ、正長元年（一二二八）薨去。和歌の作者中の最年少である。歌道の家飛鳥井家の人で初名雅氏、雅幸と改名。後に雅縁、法名宋雅。猿沢池月の歌は家

集『晴月集』秋部三四番にあり、「于時雅幸朝臣」の朱記がある。雅幸と名乗ったのは永徳二年（一三八二）頃と推定される。<sup>⑩</sup>

猿沢池月の詩歌は当代一流の漢学者菅原淳嗣と歌道家の新進気鋭の作者である藤原（飛鳥井）雅幸の競演となっている。

#### 春日野鹿

参議右大弁勸修寺経重は文和四年（一三五五）生まれ、康成元年（一三八九）薨去。藤原北家勸修寺流である。永徳元年（一三八二）八月十四日任参議。後に従二位・権大納言となる。三舟の遊では詩の舟に乗った。

権中納言一条公勝は生年不詳、康成元年（一三八九）薨去。藤原北家閑院流である。永徳二年（一三八二）正月権中納言に任ぜられ、永徳三年四月に辞す。撰閑家的一条家とは違う後に清水谷家となる家。永徳元年二月十七日の御遊・歌会に良基、道嗣等と共に参加している。家柄も官位も見合った中堅同士の組み合わせである。

#### 三笠山雪

左大臣徳大寺実時は暦成元年（一三三八）生まれ、応永十一年（一四〇四）薨去。号・野宮。法名・常実。藤原北家閑院流で永和四年（一三七八）八月左大将。永徳二年（一三八二）内大臣となる。嘉慶二年（一三八八）に左大臣となる。『待需抄』記載の官位は左大臣であるが、『扶桑名勝詩集』では左近衛大将となっている。奈良八景詩が作られたと考える。康暦・永徳期の官位は左近衛大将であった。

前右大臣西園寺実俊は建武二年（一三三五）生まれ、康成元年（一三八九）薨去。号・冷泉。藤原北家閑院流で貞治五年（一三六六）右大臣。永和元年（一三七五）従一位。永徳元年三月十五日の三舟の遊では天皇、二条良基などと共に和歌の舟に乗った。

兩人共藤原北家閑院流の出身で共に閑院流の祖公季から五代日権大納言藤原公実の子息通季（西園寺）・実能（徳大寺）から出ている。

#### 雲井坂雨

文章博士菅原秀長は暦成元年（一三三八）生まれ、応永十八年（一四一一）薨去。本姓菅原氏で東坊城家、二条家の家礼となる。秀長も淳嗣同様改元の諮問を受けたメンバーの一人であった。三舟の遊では道嗣、公時、経重、淳嗣らと共に詩の舟に乗った。『空華老師日用工夫略集』の康暦三年（一三八二）二月九日の条に「儒士秀長至出釈奠雲井坂雨詩而求改（中略）雲井坂雨詩南都十詠其一也（後略）」とある。

権中納言為重は正中二年（一三二五）生まれ、至徳二年（一三八五）薨去。俊成、定家、為家と続く歌道の名家で二条流（御子左流）の歌人。二条流の嫡子為遠が急逝したため『新後拾遺和歌集』の撰者となり完成奏進した。二条良基に認められ將軍義満の和歌の師範となり宮中での宗匠の立場は確固たるものがあつたが至徳二年に暗殺された。これも当代一流の漢学者と宮廷和歌の宗匠という豪華な競演である。

#### 東大寺鐘

権大納言久我入道相国具通は康永元年（一三四二）生まれ、応永四年（一三九七）薨去。久我家は村上源氏で具通は当時淳和奨学両院別当と源氏長者であつたが永徳三年（一三八三）以降足利義満に取って代わられた。貞治四年（一三六五）権大納言に転任。応永二年（一三九五）太政大臣に任ぜられる。応永三年（一三九六）二月三日太政大臣を辞し同月二十五日に出家し、法名を紹侃とした。翌年薨去した。前大納言四辻入道善成は嘉暦元（一三二六）生まれ、応永九年（一四〇二）薨去。順徳天皇の曾孫であり順徳源氏、四辻宮と称した。末流の皇族

であったが二条良基の猶子となり延文三年（一二五八）正月良基の推挙により従三位に加級され、超越された上臈の久我具通に抗議された。応安三年（一三七〇）権大納言に任ずる。歌人・学者として大成した。源氏物語の注釈書『河海抄』の著者として名高い。応永二年（一三九五）七月二十日左大臣に上るが間もなく辞して八月二十九日に出家、法名・常勝とした。

天皇家所縁の東大寺については村上源氏、順徳源氏と皇族の末流が詩歌を詠んだ。康暦・永徳期の公卿の中で、藤原氏以外で高位にあったのは（足利義満を除けば）この兩人であった。

轟橋行人

権中納言大炊御門冬宗は延文二年（一二五七）生まれ、応永十二年（一二四五）薨去。藤原北家師実流で応安八年（一二七五）十一月権中納言に任ぜられ永徳二年（一二八二）正月権大納言となる。

前中納言小倉実遠は元亨元年（一二三二）生まれ、至徳元年（一二三四）薨去。藤原北家西園寺流で延文四年（一二五九）正月従三位。応安二年（一二六九）八月権中納言に任ずる。応安八年（一二七五）三月民部卿となる。勅撰集『新後拾遺和歌集』に六首入集。

冬宗は詩の作者中では最年少の公卿、一方実遠は既に六十歳になるうかという老歌人である。若手とベテランの組み合わせである。

以上奈良八景の作者十六人のプロフィールを見ると、人選・詩歌の組み合わせに妙があることがわかる。整理すると、

①全員が当時の政治・文化の中心にいた貴族で、武家、僧侶、神官、女性が一人も混じっていない。

②十六人中藤原北家の出身者が十二人。他に菅原氏が二人、源氏が二人。

他家の人々も良基・道嗣とは深い関係にあった。その意味でも藤原氏による藤原氏のための八景詩歌である。

こうして作者と組み合わせを概観すると奈良八景詩歌は二条良基と近衛道嗣兩人を取り巻く詩歌に優れた公卿・朝臣の一種の見立て相撲ということが出来る。

## II-2 成立時期の絞り込み

次に『公卿補任』<sup>①</sup>を参照して作者の没年や任官の時期から奈良八景成立の時期を狭めていく。起点となるのは先述した『空華老師日用工夫略集』の康暦三年（一二八二）二月九日の条にある菅原秀長が雲井坂雨の詩を義堂周信に見せたという記事である。つまりその時以前に八景詩歌の企画は作者に周知されていたことになる。そしてその時点ではまだ出揃っていなかった、ということでもある。その周辺で作者の没年から下限を設定すると三條西公時が没したのが永徳三年（一二八三）三月であるから永徳三年の年初の頃には遅くとも奈良八景詩歌は作られていたと考えられる。

詩歌作者の官位官職表記がその詩歌を制作した時点を示している、と考えて『公卿補任』を参照する。作者が官位官職に就くあるいは辞した日を特定し、詩歌の制作時期に矛盾を生じない時期があるか検証してみる。

まず和歌の作者からみる。二条為重が権中納言になり二条良基が太政大臣になったのは共に永徳元年（一二八二）七月二十三日からである。この時既に三条公忠は前内大臣、西園寺実俊は前右大臣、四辻善成は前権大納言、小倉実遠は権中納言であった。藤原（飛鳥井）雅幸は朝臣なので『公卿補任』には名前が出てこない。ただ、藤原雅縁（前名雅氏）の歌が『新後拾遺和歌集』に「藤原雅幸朝臣」と注記されて出ていることを根拠



に永徳二年頃に飛鳥井家の雅氏が一時雅幸と名乗ったことを考証した研究が出ている。<sup>②</sup> 一条公勝は参議だが権中納言にはなっていない。雅幸を除く全員の官位官職が揃うのは永徳二年（二三八二）一月二十六日の除目で公勝が権中納言になった時点からである。四辻善成は応永二年（二三九五）に出家するので前大納言四辻入道善成の表記は応永二年以降のものとなるが、『扶桑名勝詩集』<sup>③</sup>では四辻前大納言善成と表記されている。以上のことから奈良八景の和歌が出揃ったのは永徳二年一月末以降のそれほど遠くない時期と考えてよいのではないだろうか。

次に漢詩の作者を検討する。康暦三年（二三八二）二月九日に菅原秀長が雲井坂雨の詩を義堂周信に見せて添削を頼んだ事実がある。この時点で各作者に作詩の指令が出ていたと考えることができる。一方で作者の官位官職から見て作詩の時期を検討すると、勸修寺経重が参議になったのが永徳元年（二三八二）八月十四日、『公卿補任』には「右大弁如元」とあるので当時右大弁であったことがわかる。この時点で近衛道嗣は前関白、三條西公時は権中納言侍従、久我具通は権大納言、徳大寺実時は権大納言左大将、大炊御門冬宗は権中納言である。菅原秀長・淳嗣は朝臣なので『公卿補任』には出ていないが、当時の史料から見て文章博士であることに疑いは無い。漢詩の作者の官位官職が矛盾なく揃うのは永徳元年八月中旬以降となる。そして大炊御門冬宗は翌年の一月の除目で従二位権大納言に昇進する。漢詩の作者の官位官職で見ると漢詩が出揃うのは永徳元年八月から翌年の一月までの間となる。一つ問題なのは久我具通が「権大納言入道相国具通公」となっていることである。相国とは太政大臣のことである。久我具通が太政大臣に昇ったのは応永二年（二三九五）六月、辞して入道したのは翌年二月、さらに次の年応永四年三月に薨去している。つまり入道相国の表記は具通の最晩年あるいは薨去後の呼び名である。この薨去前のわずかな時期に東大寺鐘の詩を詠ん

だとは思えないので、やはり権大納言時代の永徳元年八月以降に詠んだと考えたい。

奈良八景の作者の官位官職を精査して詩歌の制作時期を絞っていくと、作歌の指令は康暦二年の暮から翌年正月頃に出たと考えられる。漢詩は同年（二月二十四日改元して永徳元年）八月から翌年の正月までに出揃い、和歌は遅くとも永徳二年（二三八二）の一月末から数か月の間に揃った。いずれにしても各々の作者が作品を完成させたのは永徳元年八月から数か月の間であろう。永徳二年のいずれかの宴で奈良八景詩歌の披露に及んだ機会があったかもしれない。最終的に「奈良八景詩歌」としてまとめたのは久我具通入道後の応永三年以降であろう。それが出来る余裕と力量を持っていたのは入道後七年ほど生きた四辻善成とその弟子たちではないか、と考えている。

## II-3 八景詩歌制作の契機

次に康暦・永徳期に奈良八景詩歌の契機となるような事件があったかどうかを当時の日記や史書を参照して調べてみる。奈良八景詩歌について直接言及したものは秀長の雲井坂雨の詩以外には管見の限り見当たらないので、あくまで周辺状況から見ての推測に過ぎないが蓋然性の高いようなものを選んで検討を加えたい。

日本における瀟湘八景受容の主導者は禅宗の僧侶たちであり、「大慈八景」詩歌の主な制作者は京都五山の僧侶であった。容易に行くことのできない日向国の風景を詩にすることは、瀟湘の風景を詩にすることと同様で京都の禅僧たちの格好の習作となった。この「大慈八景詩歌」が成立したのが康暦二年（二三八〇）である。『空華日用工夫略集』によれば義堂周信はただ叙を書いただけでなくその八景自体の選定にも関わり、作られた詩の添削もしている。また、完成した「大慈八景詩歌集」には

二条良基の跋があったことから二条良基もこの企てに参画していたことも明らかである。現在残っているもので一景につき約十三首、全体で百二首記録されているとのことである。つまりこの康暦の初め頃京では多くの禅僧・公家が見たこともない日向国の風景を詩にすべく取り組んでいたことになる。

このような新しい試みが京で行われていたとき、それを助長する出来事が二条良基と義堂周信との間にあった。義堂周信が良基の押小路烏丸御殿に初めて出かけたのである。『空華日用工夫略集』康暦二年八月八日条に

赴二條殿倭漢連句会、入自西門、巡視泉園池亭水石、其美不可勝言、名其池曰龍躍、記実也、比者当昼有龍躍雨下之变、曰御榻閣、天子所坐榻在焉、曰洗暑亭、曰聽松亭、曰藏春閣、曰綠楊橋、曰政平水、曰觀魚台、曰古靈泉、曰水明楼、曰梅香軒、既而准后出、接余於水亭、互敘久渴之懷、引入御榻閣、倭漢連句百韻（後略）

とある。周信は良基邸の西門から入りその庭園を巡り鑑賞した。庭園の景物を龍躍池から梅香軒まで十一景記している。所謂二条殿十境と呼ばれるものの最初の記述である。中国の南宋・元の時代から寺院内で十の名勝を撰んで境地とし、それを題材に詩を読めば十詠、十題と名づけた。このような趣向は日本に渡来した禅僧から広まり瀟湘八景の受容とともに鎌倉時代末期から禅宗寺院で盛んに行われてきた。義堂周信の日記から読み取れるのは二条良基邸の庭園は十境を意識した庭づくりとなっており、それを周信が十境を選んであげること庭の出来栄を賞したということであろう。折しも二人は今川了俊からの依頼で「大慈八景詩歌」の選定と叙・跋の執筆に取り組んでいた頃でもあった。そのような二条良基の心の中に中国の真似ではない純日本の八景選定の欲求が湧いてきたとは想像できないだろうか。瀟湘八景は言うまでもなく大慈八景のよ

うに見たこともない景色に対して想像を巡らせて言葉を紡いでいくのではなく、日本の手近でかけがえのない風景を八つ選び、中国に無い日本独自の八景にしたいと考えたのである。その発想をかなえてくれる場所はどこか、良基は康暦二年の後半期をそんな思いで過ごしたのではないか。

康暦・永徳期の二条良基を巡る政治状況は生易しいものではなかった。良基は源頼朝以来の武家の右近衛大将となった將軍義満を公家社会に同化させるべく公家としての作法、朝儀故実の意味を理解させるよう指導に当たっていた。良基と義満はある種の師弟関係を結んでいた。良基のその姿勢を迎合・追従と非難する向きも多かったが延臣としての作法を指導し後見する人という意味で「大樹（義満のこと）扶持之人也」（三条公忠の日記『後愚昧記』<sup>⑤</sup>康暦元年閏四月廿八日条）とも言われた。これは足利義満の幕府こそが窮乏して節会も朝儀もままならない朝廷・公家の唯一頼るべき金の出どころであったことによる。良基の薰陶を受けた義満は政治的にも文化的にも公武両方の作法を身に着けた公卿將軍となり、その後室町幕府の全盛時代を作った。

こうして義満との緊密な関係を作る一方で、良基がもう一つ取り組まなければならなかったことは、興福寺衆徒の嗽訴への対応であった。その当時は春日神木を奉じて入洛し要求を貫徹するまで居座ることが度々あった。神木とは榊の葉に神鏡をつけて御神体に擬したものである。興福寺は藤原氏の氏寺であり春日社と習合して朝廷の帰依は篤かった。その興福寺が自らの權益を冒された際、朝廷に解決を訴えるが思う通りに事が運ばないと春日社の御神体を本殿から取り出し境内に遷座させることで朝廷に圧力をかけた。御神体の遷座はそれだけで一つの強い示威行動となったのである。その後は朝廷の対応をにらみつつ北上して入洛することが最終手段となった。藤原氏中心の朝廷ではそのような事態に



なってしまうと神威を恐れ無条件で要求を容れ御帰座を願う、というのが通例であった。しかし鎌倉時代となり武家が交渉相手となると、神威だけで無条件に要求を容れるというわけにはいかなくなり交渉は長引き御神木の滞在は長引くようになった。その間藤原氏の延臣は謹慎して出仕することができず、いきおい朝儀や政務は滞りを余儀なくされた。良基の時代は神木の入洛が暦応三年（一三四〇）、貞治三年（一三六四）、応安四年（一三七二）、康暦元年（一三七九）と四回あり、良基は貞治以降、朝廷の代表者、摂関家の氏長者として交渉に当たった。

永和四年（一三七八）興福寺は寺領を侵した大和の国人領主十市遠康の討伐を幕府・朝廷に要求したが、守護大名寄せ集めの討伐軍は大した戦果も挙げずなし崩しになってしまった。この軍事作戦の失敗によって管領細川頼之は失脚して一族と共に讃岐に去った（康暦の政変）。京での政変で一向に問題解決の兆しが無いことに業を煮やした興福寺衆徒は神木を奉じて康暦元年八月に入洛した。良基はこの事件には水面下での交渉に徹し幕府（義満）を動かして解決に当たった。將軍義満は新たに管領になった斯波義将とともに具体的な派兵の首尾を整え、十一月には解決したかに見えた。しかし衆徒はさらに利益を得ようと神木の滞在をわざと延引させた。これまでの朝廷であつたらその駆け引きに乗ってしまうところであつたが、藤原氏ではない源氏の義満には春日の神威も通用せず、義満主導で朝儀や御遊・宴は盛大に行われた。結果的には衆徒は当初の成果以上に得ることなく康暦二年十二月十五日に帰座することとなった。この時の帰座の様子が『後鑑』<sup>16</sup>第八十四卷義満將軍記十三に各書を引用して記されている。

空華日工集云。十五日小雨。春日神木帰座。（中略）神木出稍遅矣、神官従役、黄昏把炬而出、送神木者、皆藤家大臣以下神孫也、凡十二家、步行各作一隊而過、先神官、中藤家氏、後神僧、称裏頭大衆者

奈良八景考

三百余人、皆懷大刀吹螺喝道而行（後略）  
春日神木入洛記云。十二月十五日神木御帰座。（中略）二條殿下以下卿相雲客供奉。洛中雨。当山今夜大雪也。宇治迄神幸。翌日南都御記座云々。（後略）

藤原氏十二家の公卿・朝臣達が付き従って神木を送ったのである。このとき摂関家として供奉したのは二条良基の子息関白二条師嗣、近衛道嗣の子息右大臣近衛兼嗣であった。奈良八景詩歌の作者では左大将徳大寺実時、侍従中納言一条公勝、経重朝臣、雅氏（雅幸）朝臣が記録に見える。良基は供奉しなかったが、一年以上居座った神木に対して、とりあえず朝廷・幕府・興福寺それぞれの顔を潰さずに帰座させたことに安どの気持ちがあつたことは想像に難くない。奈良八景詩歌のアイデアもこの春日神木の御帰座がきっかけになって生み出されたものではないか。もちろん二条良基が直面していた難しい政治状況を考えれば奈良八景の選定など些末なことに過ぎないが、康暦二年の前半に大慈八景詩歌の選定に関わり、押小路烏丸の自邸に義堂周信を招き自邸の十景を選ぶ遊びを行った。政治と離れたところでは八景・十詠といった中国伝来の新しい詩歌の試みに興味を惹かれたことであろう。そこで父祖の地、奈良で八景を撰ぶというアイデアが湧いたのである。見慣れた南都の景色から八景を撰ぶ、即ち日本独自の八景を撰ぶことである。そしてそれを愛でる詩歌を禅僧も南都僧も神官も武家も女性も加えず、藤原北家とその縁者だけで揃えたいと考えたのである。

二条良基とその側近（為重・善成・秀長か）は康暦二年の後半期から暮にかけて八景とそれぞれの詩歌作者の選定を行った。折しも春日神木の御帰座が実現し、藤原氏諸家の公卿・朝臣が一堂に会した時、摂関家の二条・近衛にごく近い詩歌の達人たちにこの企画が共有されたのではないかと想像している。年が明けて題と短冊を贈られた作者たちは早速制

作に取り組み、早くも二月九日に菅原秀長は最初の習作を義堂周信に提示したのである。

## II-4 八景詩歌披露の仮説

永徳元年（二三八二）から二年までの間で歌が出揃い披露されるような機会があったのか、歌壇の状況や二条良基の周辺から二つの出来事に注目したい。

一つ目は勅撰集『新後拾遺和歌集』の成立である。永徳元年（二三八二）八月二十七日に撰者であった二条為遠が急死した。歌道の二条家は当主を失い息子が為衡はまだ幼いため良基の支持を受けた庶流の二条為重が宗匠となり、十月二十八日に勅撰集の撰者に任命された。為重は後円融天皇の讓位（永徳二年四月九日）前の三月二十八日に『新後拾遺和歌集』四季部奏覧を行った。閏正月を入れて半年余りで作り上げたことになる。良基はその仮名序を書いた。その一節に、

小臣、八つぎの代につかへて六そぢのよはひにあまれり、みかさのみねの松霜をかさね、さほがはのながれなみをたためり

とあり南都の景色が折り込まれている。全巻が完成したのは至徳元年（二三八四）であるが、四季奏覧だけは後円融天皇の在位中に何とか間に合わせた。永徳二年の正月から義満は後円融天皇讓位を図り、四月に後小松天皇に讓位し良基はその撰政となった。

二つ目の出来事はこの讓位に関連する。『新後拾遺和歌集』卷十七、雑歌にある良基の歌、

永徳二年、讓国の宣命に撰政のことのせられ侍りしに、忠仁公はじめてこの宣をかうぶりしが、おなじ年六十三にて侍りしを思ひ出でて

一四一五 いにしへの跡におよばぬ身なれども老の数こそかはらざ  
撰政太政大臣

りけれ

忠仁公とは藤原良房（八〇四〜八七二）のことである。清和天皇が九歳で即位したときに良房は太政大臣で撰政となり天皇を後見した。後小松天皇の即位は六歳であった。良基は良房の故事に倣い後小松天皇の元服まで撰政として後見する覚悟を示した。しかもちょうど良房と同じ六十三歳で同じ役目を負ったことに運命を感じたのであろう。藤原北家の権力基盤を磐石にした良房の父は冬嗣であり興福寺南円堂を建てた人である。ここでも良基は南都との深い縁を感じたであろう。永徳二年の年初から数か月の間、良基は和歌に心を砕き実際に訪れることは無くても南都に思いをはせる機会があったのである。

## II-5 まとめ

康暦二年前半期の太慈八景詩歌制作をきっかけとして、二条良基は日本独自の八景選定に興味を抱いた。彼が側近とともに藤原北家所縁の奈良の八景を選定し、康暦二年の暮から正月にかけて当時一流の歌人・詩人を選び組み合わせ詩歌の競作を指令した。約一年かけて詩歌を集め、出揃ったのが永徳二年三月から四月、『新後拾遺和歌集』の四季部奏覧や後円融天皇の讓位を経て、諸事落ち着いた頃に仲間内で披露に及んだのではないか。その後、奈良八景詩歌は二条良基周辺の少数の人に共有されたのみであったが、入道した四辻善成が既に関係者の多くが亡くなっていた応永七年（一四〇〇）前後に改めて弟子たちに「奈良八景詩歌」としてまとめさせた。京都ではそれは忘れ去られたが、一部が興福寺の一乗院か大乘院、或いは東大寺の尊勝院、西室などで秘蔵された。六十年ほど経った寛正六年（一四六五）九月、足利義政が春日社御参される時に話題の一つになればと誰かが取り出し、二十六日雨のために延年の宴が中止となり暇になった夜に真薬に「南都に八景あり」と見せたのではな

いだろうか。以上、かなり想像を交えながらであるが奈良八景詩歌成立について当時の状況を押えながらシナリオを組み立ててみた。

### Ⅲ 奈良八景の景物の選定について

この章では奈良八景の地名と景物の関係について考えたい。

前章で奈良八景が日本独自の八景現象であることを論じたが、アプローチを変えてさらにその意を補強したいというのがこの章の狙いである。奈良八景とは中国由来の「八景」という方法だけを用いた日本固有の、言い換えれば日本でしか成り立たない「八景」なのである。それを作り上げた二条良基やその側近たちの意図にまで分け入ってみたい。そのために奈良八景の一つ一つを組上に置いて検討していく。

#### Ⅲ―Ⅰ 奈良八景の特質

まず前提として奈良八景と瀟湘八景との比較からその特質を明らかにして奈良八景とは何かを定義したい。

瀟湘八景は元々景勝地であった湘水・洞庭湖周辺の景色を北宋時代の画家である宋迪が八景を選んで画にしたというのが一般的に知られている起源である。瀟湘の風景は古より伝説豊かな地域であり、宋迪以前からそれを題材にした詩が詠まれ画に描かれた。宋迪は既に多くの詩画の蓄積があった瀟湘の風景を自分の水墨画の技量で普遍的に表現することに主眼を置き画題として八景を定めたのである。芳賀徹が「風景の比較文化史」（比較文学研究五〇、一九八五）で喝破しているように「八景の題は（中略）卓抜でそれ自体、強い詩的映像喚起の力をもっている」のである。芳賀は近江八景の成立について瀟湘八景との比較で興味深い指摘をしている。瀟湘八景は「何世紀にもわたって親しまれた讃えられてきた

大風景のなかから、画家宋迪によって八つの見どころが選び出されて画となり、画題となつて、以後絵画史上に自律の展開をとげてきた」と述べ「風景、絵画に入る」と定義した<sup>⑦</sup>。一方、近江八景は「画題が風景に応用されるという珍しいケース」「八景」という枠組みが適用されて、そこではじめて、いわば形態をもつ風景が成り立った」「絵画、風景に入る」と近江八景の成立を述べた。確かに琵琶湖周辺の景色は古くから歌に詠み込まれてきた。それゆえ古来日本人は琵琶湖の風景を自由に詩や和歌に詠んできたが、八景という枠組みで組み合わせてみると見事に固定化してしまい、それ以上の画題・詩題を見つけられなくなってしまった、ということであろう。芳賀はさらに「絵から風景へ」の例がほかに思い当たらないと述べているが、絵画ではないが同じような思考過程を経て八景が選定されたと筆者が考えているのが奈良八景である。しかも、近江八景よりも百年以上前の実験である。奈良の歌枕として古来詠まれてきた風景をもう一度実際にある風景として見直し、そこに景物を見出し、組み合わせることで奈良八景を作り上げた。そこで「歌枕、風景になる」と定義しよう。

瀟湘八景において山市は何故晴嵐と結びつかねばならなかったのか、という分析は見たことがない。近江八景でも近衛信伊の初案は三上秋月、石山晚鐘、三井落雁であったが後陽成天皇の筆が入って石山秋月、三井晚鐘、堅田落雁となったという<sup>⑧</sup>。いずれも人口に膾炙し過ぎてそれ以外の組み合わせはあり得ないような気がしているが、そうでなければならぬ必然性は無い。宋迪や後陽成天皇の美意識が八景を決めたのである。奈良八景の景物もそれを選定した二条良基等の美意識に則ったものであつたはずである。次節では歌枕をキーワードにして奈良八景の地名と景物の関係を明らかにして、奈良八景が日本独自の八景である所以を考えたい。まず歌枕として古来名高い春日野、三笠山、佐保川、猿沢



表A 春日野・山

A 春日野・春日山・かすがの・かすがやま	1440 首
A × 若菜・若草・わかな・わかくさ	263 首
A × 雪・ゆき・ゆきに・ゆきの・ゆきを	184 首
A × 神・かみ・かみに・かみの・かみを	160 首
A × 松・まつ・まつに・まつ・まつを	138 首
A × 藤・ふぢ・ふぢに・ふぢの・ふぢを	95 首
A × 鹿・さをし	53 首

## 春日野鹿

池の四つを取り上げる。関係を明らかにする方法はデータベースを使い歌枕×景物でどれほどの和歌がヒットするかを調べる。使用するデータベースは株式会社古典ライブラリー制作「日本文学 Web 図書館」の中にある「和歌&俳諧ライブラリー」から『国歌大観』全十巻のデータベースである。検索範囲は奈良・平安・鎌倉・南北朝に絞り、有名な歌はさまざまな歌集に収録されているので検索でヒットする歌には重複もあるが、敢えて検索でヒットした数をそのまま採ることにする。

このデータベースを使い歌枕と景物との関係を探ることにより、奈良八景の特質を明らかにし、選定した二条良基等の意図を考察したい。

## III-2 歌枕と景物①

一条公勝の歌は「春日山みねのあらしやさむからんふもとの野へに鹿ぞ鳴くなる」というもので春日山も含めて考える。

春日野は現在の奈良市街の東側、奈良公園一帯の丘陵地を指す。山は藤原氏の氏神である春日大社の背後にある花山、若草山、三笠山などを含めた山々を総称する。万葉集にも五十を超える歌が収録されているほど古くから歌に詠まれてきた場所であった。総じて春の日をイメージすることが多いので春の部の歌が多く、一方で藤原氏の繁栄を願う歌も多いのは当然である。ではその春日野・山を詠み込んだ歌に組み合わされた景物は何かが多かったか、和歌・俳諧ライブラリー検索から『国歌大観』の語彙検索をかけてみると表Aのよ

うな結果となった。最も多い組み合わせは若菜・若草であった。古今集の

一八 かすがののとぶひののもりいでて見よ今いくかありてわかなく  
みてむ

は有名であり、後世の様々な歌集に再録されている。春日山が藤原氏所縁の地だけに繁栄を願う神、松、藤を織り込んだ歌も数多い。奈良八景の鹿を読み込んだ歌の数を調べると五十三首であった。勅撰集に採られた歌は意外にも少なく、

## 新勅撰集 五五六

かすがやまのりしたみちふみわけていくたびなれぬさをしかの声

## 玉葉集 五六二

なく鹿のこゑのしるべもかひぞなき道ふみまよふ春日野の原

など、わずか六首しかない。早春・春のイメージが強い春日野に秋の景物である鹿を組み合わせるにはある意味意表をついたものと言える。古の若菜・若草のイメージは既に色あせて新しい景物を探したときに最も身近でありながら詠まれることが少なかった鹿に注目したのでろう。これは奈良八景の撰者たちの慧眼であった。現在の感覚で測れば付き過ぎで陳腐に感じるだろうが、当時はむしろ新しい発見であった。

## 三笠山雪

西園寺実俊の歌は「三かさ山さしてたのめばしら雪のふかき心を神やしるらん」である。三笠山は標高二八三メートル。その名は笠を伏せたよな山容に由来する。三笠山雪は江天暮雪と重なる冬の景物である。三笠山は奈良において雪の景色を織り込むためには格好の山である。しかし三笠山で何より有名なのは百人一首にもある安倍仲麻呂の  
天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも

などは代表的な佐保川の千鳥を詠んだ歌である。

なり

一四三 冬さむみさほのかはらのかはぎりにともまどはせる千鳥なく

題不知

貫之

三條公忠の歌は「飛ほたる影をうつして佐保川にあさせにふかきこころをぞしる」である。佐保川は春日山を源として奈良市内から大和郡山地域に南流する川で最後は大和川に合流する。古くから川筋は景勝地で万葉集にも多数詠まれた。佐保川という歌枕で歌の数を調べてみると表Cのような結果となった。実に半数近くの歌が千鳥を詠んでいる。佐保川と言えば千鳥というのは古よりの約束であった。千鳥は俳諧では冬の季語であり和歌でも冬の景色を詠んだものが多い。『拾遺集』巻四 冬

佐保川蛩

であろう。三笠山の月は本来であれば最も八景に入れやすい景物の一つであると思われる。三笠山をデータベースで語彙検索してみると表Bのような結果だった。麓に春日社が鎮座していることで神を詠み込んだ歌が一番多かった。笠の縁語で雨を織り込んだ歌も多い。月を詠んだ歌もあるが多くの無い。雪と組み合わせた歌を調べると、みゆき<sup>20</sup>行幸は除いて二十七首であった。やはり雨と同様に笠の縁語として雪も詠まれていたということであろうが数は多いとは言えない。八景の景物として雪景色を入れるために奈良の街から見える三笠山と雪を組み合わせたのであろう。過去の景物である月は敢えて外したと考えたい。

表 B 三笠山

B 三笠山・三笠の山・みかさやま・みかさ山・みかさのやま・三かさ山	545 首
B × 神・かみ	99 首
B × 雨・しぐれ・さみだれ・むらさめ	41 首
B × 月・つき	29 首
B × 雪・ゆき (みゆき = 行幸は除く)	27 首

表 C 佐保川

C 佐保川・佐保の川・さほかは・さほのかは・さほの川	194 首
C × 千鳥・ちどり・ちどり・千どり・ち鳥	93 首
C × 青柳・あをやき・あをやぎ・青やき・あを柳	18 首
C × 蛩・ほたる	0 首

次に目につくのは青柳である。青柳は言うまでもなく春の季語である。『玉葉和歌集』巻一 春

題しらず

坂上郎女

八七 うちわたすさほのかはらの青柳も今は春  
べともえにけるかも

これなどは春のイメージを持つ美しい和歌である。では蛩はどうであろうか。佐保川の景物は冬から早春のイメージで固定されているが、夏の蛩を織り込んだ和歌は一つもヒットしなかった。実は夏の季節感を持った佐保川の和歌はほとんど見当たらない。佐保川の夏の風情は古くから見過ごされてきたのである。佐保川は浅く緩やかな流れ

の川なので、夏の蛩は太古から見慣れた景色であったことは想像に難くない。ただそれを誰も和歌に詠むことをしなかったのである。それは春日野の鹿が見慣れ過ぎて和歌の題になることが少なかったことに通じる。冬のイメージを逆手にとって蛩を取り上げて佐保川の夏の美しい風情を改めて発見し景物としたのは八景選定者の手柄である。

猿沢池月

藤原雅幸の歌は「長閑なる浪にぞこほるさる沢の池よりとおく月はすめども」である。猿沢池の伝説は『大和物語』にある采女伝説とそれを詠んだ柿本人麻呂の和歌があまりにも有名で、ほとんどの和歌がその伝説を念頭に置いて詠んでいると言っても過言ではない。

『拾遺和歌集』巻第二十 哀傷 にある柿本人麻呂の歌

さるさはの池にうねべの身なげたるを見て

人まろ

表D 猿沢

D猿沢・さるさは・さるさわ	52首
D×青柳・あをやぎ・あおやぎ・あを柳	3首
D×月・つき	3首

一二八九 わぎもこがねくたれがみをさるさはの池の  
たまもと見るぞかなしき  
『大和物語』 第五十段

みかど (ならのみかど)

二五三 さるさはのいけもつらしなわぎもこがたまも  
かづかばみづぞひなまし

歌枕としての猿沢池はこの二つの歌にすべて集約されてしまし、歌のイメージが固定化されて、そのためか歌の数も多くない。猿沢池の歌の数を検索してみると、表Dの通りである。

猿沢池に詠み込まれている景物では青柳が目立つ程度である。猿沢池には現在でも伝説を踏まえた衣掛柳があるので、柳を詠んだ歌も伝説に依拠している。月を詠んだ歌は、

『夫木和歌集抄』 卷第十三 秋部四

御集

後京極撰政

五二八三 さるさはの玉もの水に月さえて池にむかしの影ぞのこれる  
などわずかである。藤原雅幸は池に映る月ではなく「いけよりとおく」と池の彼方に見える月を詠んで、風景を大きく捉えている。また、采女伝説の跡を残していない。八景選者の意を受けて新しい猿沢池と月の風景の面白さを歌に表したのである。

以上、奈良を代表する歌枕「春日野・山」「三笠山」「佐保川」「猿沢池」について検討した。いずれも従来の歌枕として持っていた季節感や背景にある伝説を昇華し、新しい景物を組み合わせることで風景の面白さを表現している。またそれぞれの和歌もそのような撰者の意を受けた

ものとなっている。

### III-3 歌枕と景物②

次に南円堂藤と東大寺鐘の二つを検討する。南円堂は藤原北家繁栄の基盤を築いた藤原冬嗣が弘仁四年(八三三)に亡父藤原内麻呂追善の為に建てた堂で、藤原北家の心の拠り所である。古来南円堂そのものを詠み込んだ歌は無いが、特に有名なのは『新古今和歌集』 卷第十九 神祇歌にある歌、

一八五四 ふだらくの南のきしにだうたてていまぞさかえむ北の藤な  
み

である。この歌の後に詞書として「この歌は、興福寺の南円堂づくりはじめ侍りける時、かすがの榎のもと明神よみたまへりけるとなむ」とあり、神が詠んだ歌とされている。この歌以降藤原北家の繁栄と共に藤は南円堂と固く結びついた景物となっている。

二条良基の歌も「藤なみは神のこと葉の花なれば八千世をかけて猶そさかへん」とあつて南円堂や南という言葉は入っていないが、「藤なみ」「神のこと葉」「猶そさかへん」という言葉を入れることで藤原北家の栄を願う歌である。当時朝廷側の最高権力者である二条良基の氏長者としての責任感あふれた歌ということが出来る。

一方、東大寺鐘は烟寺晚鐘と重なるもので、奈良に於いても外すことの出来ない景物である。ただ東大寺そのものを歌に詠んだのは慈円の家集『拾玉集』 第四にある、

四二〇二 是体如は東大寺なる盧遮那仏げにあかがねの大仏かは  
が唯一である。四辻善成の歌も「おく霜の花いつくしき名もたかしふりぬる寺の鐘のひびきに」というもので、東大寺の鐘を直接的には表現していない。和歌の世界では長谷寺の鐘は詠まれても東大寺の鐘は詠まれ



ることが無かった。東大寺の鐘は古来歌題と認識されてこなかったのである。ただ、奈良八景に鐘の音を入れると考えた時、東大寺以外に選択の余地は無い。東大寺鐘は身近でありながら歌枕を超越した存在であり、八景の撰者たちはかえって新鮮な思いで東大寺の鐘を認識したのではないだろうか。

最後にこの奈良八景によって初めて和歌に詠まれた新しい歌枕ともいふべき雲井坂雨と轟橋旅人について検討する。二条派の宗匠為重の歌は「むら雨のはれまにこえよ雲井坂みかさの山はほどちかくとも」というもので、村雨、晴間、雲、笠と縁語を連ねた技巧的な面白い歌である。宮廷のベテラン歌人実遠の歌は「うちわたる人めもたへず行く駒のふみにぞならせ轟の橋」である。旅人という言葉こそ入っていないが行き交う人が目に浮かぶ歌である。

この雲井坂を詠った歌はデータベースで検索しても出てこない。轟橋は元々近江の歌枕であった<sup>20</sup>よう、データベースで奈良の轟橋を詠ったとはつきりわかる歌は無い。雲井坂・(奈良の)轟橋ともに古来歌に詠まれた場所では無かった。

轟橋と雲井坂について貞享四年(一六八七)刊の奈良の地誌『奈良曝』巻二に詳しい説明がある。

雲井坂 押上町分南へゆく壺里づか辺を云。此所の夜雨南都八景の内也。此所の東に東大寺の門の跡あり。むかし東大寺さかへし時、此門の額に金光明四天王護国寺とかきて、此がくの四方に四天王を創りてがくの四すみを四天王に持たせるを、此門のがくとしけり。何れの世にか有けん、夜々龍まいさがり、此がくをねぶりける。其時に此辺に雲うづまきし雲井坂と名付しとかや。

轟橋 雲井坂の南にみどりか池のほとりにわづか成はしあり。車三りようならぶゆへにかくいふとかや。此橋の旅人南都八景也。

『奈良曝』に描かれた雲井坂の龍の逸話は菅原秀長の雲井坂雨の漢詩の典故となった。

この辺りは名所というよりも奈良へ入る人々の参集する場所であった。興福寺大乘院の記録『大乘院寺雜事記』尋尊大僧正記四十二、寛正六年九月二十一日、將軍足利義政が春日社参のために奈良に入ったときの記録を見ると、

一未下剋公方御下着、四方輿、公卿四人同殿上人九人各乘馬、於雲居坂而大衆見物申、仍武家下馬、但狩衣衆下馬云々

とあり、多くの人々が雲井(居)坂辺りに集り將軍の奈良入りを見物したことが知れる。奈良に行き交う人が常に通る道を名所として認識し、そこに雨と旅人とを結びつけて八景の一部に加えたわけである。その情趣は水墨画的な朦朧とした風景では無く輪郭のある極めて人間臭い風景と言えるだろう。これらを新しい歌枕として八景に加えたことで奈良八景の世界は中国式の瀟湘八景から遠く離れて、日本人のための新しい風景を現出したと言える。

以上、奈良八景の地名と景物との関係をそれぞれ検討した。選定された時代から既に六百数十年経ち、選定された時の新鮮さは薄れむしろ陳腐な感じさえするのは致し方無い。しかし古代の歌枕という視点から見直すと、奈良八景の選定とは、古い歌枕と見慣れた景物との意表を突いた組み合わせによって新しい情趣を醸す、また見慣れた風景が景物との組み合わせによって新しい歌枕になる、という実験的な試みであったことがわかる。その結果として純日本の八景が誕生したのである。

#### IV 結びに代えて

奈良八景の成立の過程と背景、地名と景物との関係についてこれまで

に無かった詳細な検討を加え考察した。奈良八景が瀟湘八景受容期にその規矩を離れ日本独自の八景として成立したという仮説を論証した。

確かに八景という趣向は日本では禅宗僧侶から始まり、五山文学の一分野として広まっていた経緯があるが、奈良八景に関して言えば、その起爆は禅宗の影響があったが、成立の過程や背景には禅宗の関わりは無く、むしろ注意深く排除されていたとすら思える。永島福太郎が言及した「公家と禅家との交歓の産物」<sup>③</sup>とは言えないのである。八景現象から禅臭を抜いたものが奈良八景である。八景の撰者と目す二条良基が八景選定のアイデアだけを頂き自由に撰んだのである。その後半世紀以上経って再発見したのが禅僧の蔭涼軒真蘂であったが、それは足利義政春日社参という機会と、延年の遊宴が雨の為中止になったという偶然によるものである。以上の経緯を鑑みると近世以降の観光や地域の話題作りのための八景選定というブーム的な動きとは一線を画したものである。奈良八景の近世に入ってからの展開については稿を改めて論じたい。選定当時、望みうる最高の詩歌人を総動員して奈良八景詩歌が作られたが、その後どれほどの広がりやを以て文芸・絵画・演芸・観光などに貢献したか、これも正しく蒐集・整理・検討されているとは言いがたい。次稿では出来る限りアーカイブして奈良八景の近世以降の全貌を明らかにしたいと考えている。奈良八景を正しく日本の八景史に位置付けそのユニークさを広く認識させることが筆者の目標である。

## 注

- ① この稿で述べる「八景現象」という言葉は、内村精也「宋代八景現象考」(中国詩文論叢二〇、二〇〇一)に於いて定義され使われたものを踏襲する。
- ② 『空華老師日用工夫略集』はすべて国際日本文化研究センターデータベース「中世禅籍テキスト」を参照した。 <http://db.nichibun.ac.jp/sp1/ja/>

<category/zenseki.html>

- ③ 『大乘院寺社雑事記』第三卷(三教書院、一九三二)「尋尊大僧正記四十二」五二三頁、九月二十六日条にも「一依雨下今夜延年無之」の一文がある。大乘院の人々も義政随行の人々との遊宴を楽しみにしていたようだが、生憎の雨で当てが外れて室内での雑談になったのだろう。
- ④ 永島福太郎「蔭涼軒真蘂西堂の南都見物」(禅文化研究所紀要15、一九八八)の六〇八頁十三行目から「南都八景」の言及がある。この引用は六〇九頁八行目から十二行目まで。
- ⑤ 註④論文、六一〇頁三行目。
- ⑥ 井上宗雄『中世歌壇史の研究』南北朝期(明治書院、一九六五)八三六頁八行目の「注」参照。
- ⑦ 堀川貴司『瀟湘八景』(臨川書店、二〇〇二)三九頁一行目。
- ⑧ 小川剛生『二条良基研究』(笠間書院、二〇〇五)六一七頁、二条良基年譜、永徳元年最終行参照。
- ⑨ 新日本古典籍総合データベース『待需抄』巻六、「南京八景詠歌」画面四三六・四三七参照。  
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100028733/viewer/436>
- ⑩ 須藤智美「飛鳥井雅縁の基礎的問題」藤原雅幸朝臣考(国文学研究一七六、早稲田大学国文学会、二〇一五)二九頁上段二三行目。
- ⑪ 国立国会図書館デジタルコレクション  
『国史大系』第十卷「公卿補任中編(経済雑誌社、一九〇一) <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991100>
- ⑫ 註⑩同論文参照。
- ⑬ 新日本古典籍総合データベース『扶桑名勝詩集』上巻「南都八景」画面二一～二二
- ⑭ 註⑦同書二四頁五行目参照。  
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100224718/viewer/21>
- ⑮ 『大日本古記録』後愚昧記三(岩波書店、一九八八)
- ⑯ 国立国会図書館デジタルコレクション  
『国史大系』第六卷後鑑八十四義満將軍記八六〇頁、  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991113>

⑰ 芳賀徹「風景の比較文化史」―「瀟湘八景」と「近江八景」（比較文学研究五〇―一九八六）一〇頁下段二三行目から一一頁上段三〇行目まで参照。

⑱ 滋賀県編『滋賀県名勝調査報告』（滋賀県、一九三八）第一近江八景、一〇頁九行目以降参照。伴蒿溪の随筆『閑田耕筆』引用部分。報告の筆者は「間接ながら後陽成天皇の御選撰撰が働き、その権威によってよくそれ以前の八景の名に代って広く衆人の同意を得、後世永くまた改むることなきに至ったものといふべきであろう」と結論付けている。

⑲ 千野香織「春日野の名所絵」（『秋山光利博士古稀記念美術史論文集』所収、便利堂、一九九一）では、古来の春日×若菜という景物の組み合わせが神鹿思想の伝播により秋の景物である鹿に置き換わっていった経過が論じられている。しかし鹿は秋の表象ではなく春日信仰の中で季節を超えた景物として捉えられている。筆者はこれまで論じてきた通り、奈良八景の成立から見て春日信仰は既に自明のものとしてことさら取り出すまでもなく、春日野における最も親しく見ることの出来る景物として捉えたと考える。また千野は『空華日用工夫略集』における雲井坂雨の漢詩を「禅僧達が作詩を楽しんでいた」と考えているがこれは奈良八景成立の経過を見れば誤解であるとわかる。また、南都八景を定義して「全体としては、和歌世界の伝統という文脈の上に中国から新たに摂取した文化を載せてみた、という構図である」と述べているが、春日野鹿のみの検証でここまで言い切るのは早計のように思える。

⑳ 三笠山×「ゆき」で語彙検索をかけると「みかさ山さしてきにけりいそのかみふるきみゆきのあとをたづねて」の歌が複数ヒットする。『詞花和歌集』四一八、『千載和歌集』一二五六、『玄々集』一四四、『続詞花和歌集』七四〇などである。この歌の「ゆき」は明らかに「行幸」のことであるので省いた。

㉑ 『夫木和歌抄』巻二一、雑部三  
とどろきのはし、近江

永久四年九月雲居寺後番歌合、霧

九四一〇旅人も立つ河霧におとばかりききわたるかなとどろきの橋

とあり、現在でも滋賀県近江八幡市安土町東老蘇に轟橋、轟川、轟地蔵な

覚盛法師

奈良八景考

どが残っている。近所に歌碑も建っている。

②② 註④同論文、六一〇頁一八行目参照。

## 参考文献

書籍

- 渡辺明義編『日本の美術』九一二四瀟湘八景 至文堂一九七六  
堀川貴司『瀟湘八景』臨川書店 二〇〇二  
金沢文庫編『西湖憧憬』図録 二〇一八  
小川剛生『南北朝の宮廷誌』臨川書店 二〇〇三  
小川剛生『二条良基研究』笠間書院 二〇〇五  
井上宗雄『中世歌壇と歌人伝の研究』笠間書院 二〇〇七  
井上宗雄『中世歌壇史の研究』南北朝期明治書院 一九六五  
小川剛生校訂『迎陽記』第二 八木書店 二〇一六  
史料編纂所編『大日本古記録』後愚昧記三岩波書店 一九八八  
久保田淳他編『歌ことば歌枕大辞典』角川書店 一九九九  
吉原栄徳『和歌の歌枕地名大辞典』おうふう 二〇〇八  
滋賀県編『滋賀県名勝調査報告』一九三七

論文

- 芳賀徹「風景の比較文化史」東京大学比較文学研究五〇 一九八六  
永島福太郎「蔭涼軒真薬西堂の南都見物」禅文化研究所紀要一五 一九八八  
蔡 敦達「日本の禅院における中国的要素の摂取」  
日本研究国際日本文化研究センター紀要二三 二〇〇一  
内山精也「宋代八景現象考」中国詩文論叢二〇 二〇〇一  
平井修成「近江八景論」常葉学園短期大学紀要三七 二〇〇六  
有澤晶子「中国における見立の表象としての八景」  
東洋大学アジア文化研究所年報四七 二〇一二  
武 瀟瀟「瀟湘八景」の伝来に関する新知見」大阪大学デザイン理論七〇 二〇一七  
鍛冶宏介「近江八景詩歌の伝播と受容」京都大学史林九六 二〇一三



中村真菜美「江戸時代後期における「八景現象」」美術フォーラム二一

二〇二〇

千野香織「春日野の名所絵」『秋山光和博士古稀記念美術史論文集』

便利堂 一九九一

有吉 保「中世飛鳥井流の歌壇活動の考察（一）」

日本大学文学部人文学研究所研究紀要四九 一九九五

須藤智美「飛鳥井雅縁伝の基礎的問題」

早稲田大学国文学会国文学研究一七六 二〇一五

#### Web

国際日本文化研究センターデータベース「中世禅籍テキスト」

<https://db.nichibun.ac.jp/pc/lja/category/zenseki.html>

新日本古典籍総合データベース『待雷抄』巻六

<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100028733>

国立国会図書館デジタルコレクション

『国史大系』第十巻公卿補任中編（経済雑誌社、一九〇一）

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991100>

国立国会図書館デジタルコレクション

『国史大系』第六巻後鑑八十四義満將軍記

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991113>

新日本古典籍総合データベース『扶桑名勝詩集』上巻

<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100224718?viewer/21>

公卿類別譜

[https://geocity1.com/okugesan\\_com/ichiran.htm](https://geocity1.com/okugesan_com/ichiran.htm)

日本文学 web 図書館

<http://www.kotenlibrary.com/download/koshokan/>

（本学大学院博士後期課程）